



Title	再編される<花鳥><山水>の図像学 : 「十長生図」「海鶴蟠桃図」を中心に
Author(s)	井戸, 美里
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 22-23
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67714">https://doi.org/10.18910/67714</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 再編される〈花鳥〉〈山水〉の図像学 — 「十長生図」「海鶴蟠桃図」を中心に —

井戸美里／京都工芸繊維大学

東アジアの美術において〈花鳥〉や〈山水〉のモチーフは、その吉祥性や普遍性から広く受容されてきた。特に花鳥画は、中国絵画の影響を受けながら日本や朝鮮半島においても描かれ、贈答品として東アジアを往還する主題であった。本発表は、こうした〈花鳥〉〈山水〉の図像的交流の延長線上として、これまでほとんど考察されていない1910年代の朝鮮半島の宮廷における日本人画家の活動に光を当てるものである。

### 1. 朝鮮における花鳥画と金屏風

中国に起源を持つ花鳥画であるが、日本では15世紀には画中画や文献資料から〈花鳥〉の金屏風の存在が知られ、これらは贈答品として中国や朝鮮へ贈られていたとされる。一方で、ギメ美術館蔵「春日松鹿図」「秋夜竹鶴図」は朝鮮から日本に贈答された花鳥画の作例として注目に値する。日本から中国や朝鮮に贈られた屏風の多くは狩野派が担当したこと、江戸時代に至っては朝鮮通信使来日の際にも多くの屏風が贈られたことが先行研究において指摘されてきた。朝鮮に贈答された花鳥画の遺品としては、韓国国立古宮博物館に現在所蔵される狩野友甫宴信筆「刈田雁秋草図屏風」(1748年)や狩野梅笑師信筆「牡丹図屏風」(1762年)が挙げられる。

このような狩野派の花鳥画は朝鮮においても好まれ、サムソン美術館 Leeum 所蔵の伝金弘道筆「金鶏図屏風」(18世紀頃)のような日本の花鳥画をまねたような作品も知られる。本作品は、華城に置くために日本の屏風を金弘道に写すよう命じたものとされる。実

は、本作品の構図やモチーフを忠実に模写した作品がギメ美術館に所蔵される。これらの作例は、当時の朝鮮王室における日本式の屏風絵の受容の実態について示してくれる。大木の下で水辺に向ってたたずむ〈鶏〉の構図や水景の小禽のモチーフなどは、狩野松栄筆「花鳥図屏風」(ボストン美術館蔵)のような作例を彷彿とさせ、中国の吉祥図案を基本としながら、狩野派の「花鳥図屏風」に倣って制作されたことが想定される。

### 2. 朝鮮王室における花鳥画の受容

— 「海鶴蟠桃図」と「十長生図」について —

そもそも花鳥画はその吉祥性から朝鮮の宮廷においては古くから享受されており、上述のように日本から贈られた屏風が〈牡丹〉のモチーフであったのは、朝鮮半島において〈牡丹〉が富貴の象徴として国家の太平を祈願し、宮中儀式の際に使用されていたこととも関わるだろう。このほかにも宮中でさかんに絵画化された画題としては、「十長生図」と「海鶴蟠桃図」を挙げることができる。

「十長生図」は〈日〉〈月〉〈山〉〈水〉〈松〉〈亀〉〈鹿〉〈鶴〉〈桃〉〈靈芝〉(〈竹〉や〈雲〉が入ることもある)など不老長生を意味する十種類を一つの画面に配す。これらのモチーフは中国の道教や神仙思想に由来するが、十種類を合わせて画面を構成するのは朝鮮美術独自の特色で、無病息災、長寿や国家繁栄の意味を込めて制作された。たとえば、オレゴン大学博物館蔵「十長生図屏風」は病にかかった王世子の回復を祝う宴(1879年)のために制作されたと推測されている。

一方、「海鶴蟠桃図」も神仙思想や長寿を願う吉祥的な画題であり、波間の岩に立つ〈鶴〉が不老長寿の象徴である〈桃〉とともに描かれる。たとえば、ホノルル美術館蔵「海鶴蟠桃図」（1902年）は、高宗の誕生日のために依頼されたとされ、伝統的な朝鮮の宮廷における技法で描かれながらも、画面の半分以上を占める図案的な金箔による雲には日本の金屏風の影響が見られるとされる。

### 3. 1910年代朝鮮王室における〈花鳥〉〈山水〉のイコノロジー

朝鮮時代後期の王室における花鳥画制作の実態は、1910年代における日本人画家の朝鮮での作画活動を考えるうえで極めて重要である。しかしながら、このような実態はほとんど知られておらず、韓国でも Kang Minki 氏が弘益大学大学院に提出した博士論文「近代転換期韓国画壇の日本画流入と受容——1870年代から1890年代まで——」（2004年）において包括的な議論が展開されるものの、個々の作家や作品についての検討はこれからであるといえる。

天草神来（?～1917）は日本での活動は不明な点が多いが、1902年に朝鮮に渡り個人の画室を開き、1915年まで滞在したことが知られ、1913年に徳寿宮の障壁画として「松鶴図」を描いたとされる。発表者が韓国国立古宮博物館において調査した「松鶴図」は作者未詳とされるが、本作品こそが神来が徳寿宮の障壁画に描いた「松鶴図」に該当する可能性が高く、中国由来の〈鶴〉のモチーフを応用しながら朝鮮王室における「十長生図」や「海鶴蟠桃図」を意識して制作されたことが推測される。

また、佐久間鐵園（1850-1921）と益頭峻南（1851-1916）の手になる、古宮博物館所蔵の「松鹿図屏風」と「桃雙鶴図屏風」

（1912年）の存在は注目に値する。佐久間鐵園は仙台藩の画員を務める北宗派の画家で、1908年に訪韓した。「金剛山図」（1915年、旧徳寿宮所蔵、中央博物館蔵）を描いたことも知られる。一方、益頭峻南は、野口幽谷のもとで花鳥画を修め、南画家として大成し、宮内省の御用もつとめた。1910年頃訪韓した。

ここで留意したいのは、鐵園も峻南も中国の伝統的な絵画を学んだ画家であり、彼らが朝鮮において描いた作品がまぎれもなく東アジアの伝統的な画題としての〈花鳥〉〈山水〉であった点である。上記の「松鹿図屏風」と「桃雙鶴図屏風」は清の沈南蘋筆「鹿鶴図屏風」を引用していることが明らかであるばかりか、まさに、〈松〉〈鹿〉〈桃〉などのモチーフは、当時朝鮮の宮廷画家によって描かれた「海鶴蟠桃図」や「十長生図」を想起させる。このような東アジアの伝統に根差した南画家の描く〈花鳥〉〈山水〉の作品は、日本の皇室においても当時愛好されていたが、特筆すべきは、朝鮮の宮廷のために描かれたと考えられる上記作品のほか、中国の袁世凱に対しても峻南は「孔雀牡丹」「菊花に鶏」を描いていることである。

後に提唱される「東洋画」に格好の題材となった〈花鳥〉〈山水〉のモチーフは、東アジアにおける共通の「文人画」という素地を利用し、日清・日露戦争を経て日本が「東洋」の支配を進めていく対外的な日本のナショナリズムのもと、新たなコンテクストのなかで再編されていく。「東洋画」という言葉は朝鮮では卞栄魯により1920年に初めて使用されたとされるが（喜多恵美子「朝鮮美術展覧会と朝鮮における「美術」受容」, 2010年）、1910年代朝鮮で活動した日本人画家の作品は、植民地期において東アジアを包括する概念として利用された「東洋画」の嚆矢と位置付けられるだろう。